追　悼　羽曳野病院と遠藤薫先生 —— 先生の早逝を悼む

私共協会の理事をお願いしておりました、遠藤　薫先生が2016年10月21日にご逝去されました。この度、協会の名付け親でもある、あおきクリニック院長　青木　敏之先生より追悼文をお預かり致しました。謹んでご紹介させていただきます。
スタッフ一同、遠藤先生のご冥福をお祈り申し上げます。合掌。

大阪府立羽曳野病院（現 大阪はびきの医療センター）で共に診療し研究した遠藤薫先生が、2016年10月21日に闘病のすえ帰らぬ人となりました。遠藤先生は情の人であり、よく話を聞き、よく説明する皮膚科医として和歌山市で多くのアトピー性皮膚炎患者さんに慕われていました。

1989年1月、遠藤先生が大阪大学から羽曳野病院にこられたときから、小生が退職した1998年3月まで約9年を一緒に過ごしました。共に働いた若い同僚に先立たれるのは初めてです。優れた人物であっただけに大変残念に思います。元気な頃の遠藤先生を思い出しながら追悼文をしたためます。

遠藤先生は、東京大学卒業後に一旦企業に就職、5年務めた後に大阪大学医学部を教養部からやり直したという経歴の持ち主で大いに期待されていました。そして、小嶋益子、足立準、吹角隆之先生と小生の4人がいるところに着任しました。

そもそも羽曳野病院は結核病院から転換をはかり、総合病院に近い形で1976年に日本で初めて診療にコンピュータを導入した病院として開院しました。コンピュータはもちろん診療効率化のために導入されたのですが、それを使えば病気が診断できると受け取られ、病因が明らかになることを期待して多くの患者さんが殺到したのが皮膚科でした。想像できなかったことは、その多くが蕁麻疹ということでした。ところが、当時はまだ蕁麻疹はほとんど未解の病気でしたので、患者さんに満足できる説明も治療もできず、辛い思いをしました。未だに恥ずかしい記憶が残ります。

やむなく始めたのが蕁麻疹の原因解明のための研究でした。いろいろなタイプの蕁麻疹患者さんがたくさん来られましたので、少しずつ理解が進み研究成果もあがってきました。最大の発見は、感染症とくに風邪ひきが主要な発症誘因であることがわかったことでした。この発見で患者さんに対応することにすこし自信が持てるようになっていました。また、小麦摂取後しばらく時間をおいて運動すると蕁麻疹やアナフィラキシーを生じる食物依存性運動誘発性のものがあること、日光蕁麻疹を起こす波長がいろいろあることも明らかにすることができました。また、コリン性蕁麻疹は汗アレルギーであることを明らかにできたことも大きな発見でした。これには開院当初に活躍した久志本東、堀古民生先生などの貢献もあります。

遠藤先生が羽曳野病院に着任したころには、蕁麻疹の患者さんは減り、アトピー性皮膚炎の患者さんが増えていました。難治性の患者さんが多数受診され、その対応に標準治療と脱ステロイドの間で右往左往した時期でした。

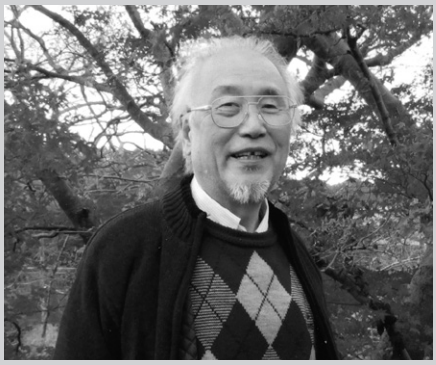
研究テーマはアトピー性皮膚炎に移りましたが、それは多難を極めました。基礎的研究ができない病院でもできる独創的研究として始めたのは、かゆみを測ることでした。もちろん、かゆみは自覚症状なので本当の意味での測定はできませんが、それに対する反応である引っ掻きを測ることによって推定できます。さいわい“コンピュータ”病院でしたので古林榮二郎さんという優れた技師が在職しており、その協力を得て睡眠の浅いところで掻き動作が多いことが明らかになりました。しかし、そのときに用いた計測法は患者さんにも分析にも大きな負担になりましたので、引っ掻きの動きをカウントできる小さな装置を指先につけて測る方法を考えついたのが遠藤先生でした。その成果は1997年の北欧4国の皮膚科雑誌に掲載されています。原因究明や治療法に一所懸命だったことがわかります。

遠藤先生は思いついたことをすぐに確かめずにはおれない研究心の旺盛な人物でした。その思いつきの幅は広く、しかも同時進行的にコツコツとデータを集めて次々と論文にまとめていくのが得意な人でした。それらの成果は遠藤クリニックの旧ホームページでみることができますが、1990年から2003年に数十編の論文があり、その一端を挙げますと、ダニ除去、ペットアレルギー、表在性細菌、民間療法、酸性化粧水、食物制限の解除、ステロイド外用離脱の成功例、かゆみなどに関するものです。珍しいものとしては、これはにわかには信じられませんが、ステロイド外用すると女児が生まれやすい、というものもあります。遠藤先生はアトピー性皮膚炎を環境病として捉える考え方を重視していましたので、過労、ストレスなどの影響で、幹線道路沿いの住民にアトピー性皮膚炎が多いという論文もまとめています。

遠藤先生は体格が大きかったですが性格は大変穏やかで、かつ快活で細かいことにこだわらない人物でしたので、患者さんには絶大な人気がありました。趣味の囲碁は4段だったと思いますが、打ち回しは攻撃的なところが一切なくて、相手の打つ手を受けるというタイプでしたがよく勝っていました。お酒、ゴルフはやらず車も運転しませんでした。ところが、競馬だけは好きだったようで、桜花賞とか皐月賞などという言葉を彼の口から聞くことがありました。他方シャイなところがあり、議論で反論されるとバツがわるそうに独特の表情で口をとんがらせていたのを思い出します。甘いものが大変好きで通勤電車の中でアンパンをほおばっているところを見かけたこともありました。そのせいかよく肥えていました。あるとき、スマートになっていたので尋ねると、糖尿病のためのダイエットの成果だったのですが、しばらくして元の体型に戻っていました。若いころ胃潰瘍の手術をしたことがあり、術後に肥えるのは胃がんではないのだと自慢していました。診療所前にある地区唯一の児童公園が大型スーパーになるという話があり、子供たちのために公園存続の署名活動に尽力し、2627名の署名を集めて市長に訴えたのですが、残念ながら阻止することはできなかったそうです。この活動が大きなストレスにもなって、胃の調子が悪いのを我慢していたことで胃がんに気づくのが遅れたと聞いています。享年65歳でした。まだまだやる気満々だったと思います。彼にとっても周囲にとっても大変残念なことです。来世でも書き物をしているように思えてなりません。

心よりご冥福をお祈りします。

合掌
あおきクリニック　青木　敏之



故　遠藤　薫 先生

【遠藤先生ご経歴】

昭和45年 4 月	東京大学理科II類入学
昭和49年 3 月	東京大学農学部水産学科卒業
昭和49年 4 月	伊藤ハム栄養食品株式会社入社、中央研究所に配属
昭和54年 5 月	同上退社　昭和56年4月　大阪大学医学部入学
昭和62年 3 月	同上卒業、大阪大学医学部皮膚科学教室入局
昭和64年 1 月	大阪府立羽曳野病院皮膚科に勤務、アトピー性皮膚炎の治療に専念。
平成13年 8 月	同上退職
平成13年11月	遠藤アレルギークリニックを開院。
平成28年10月	逝去。クリニックを廃院。

日本皮膚科学会専門医　日本アレルギー学会専門医（皮膚科）　公害防止管理者水質4種